イエスの復活

1. 死の由来

📖 「神は人間を不滅な者として創造し、御自分の本性の似姿として造られた。悪魔のねたみによって死がこの世に入り、悪魔の仲間に属する者が死を味わうのである。」知恵の書 2,23-24

📖 「神が死を造られたわけではなく、命あるものの滅びを喜ばれるわけでもない。生かすためにこそ神は万物をお造りになった。世にある造られた物は価値がある。滅びをもたらす毒はその中になく、陰府がこの世を支配することもない。義は不滅である。神を信じない者は言葉と行いで自らに死を招き、／死を仲間と見なして身を滅ぼす。すなわち、死と契約を結んだのだ。死の仲間としてふさわしい者だから。」知恵の書 1,13-16

📖 「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。」ロマ 5:12

📖 「あなたは存在するものすべてを愛し、お造りになったものを何一つ嫌われない。憎んでおられるのなら、造られなかったはずだ。あなたがお望みにならないのに存続し、あなたが呼び出されないのに存在するものが果たしてあるだろうか。命を愛される主よ、すべてはあなたのもの、あなたはすべてをいとおしまれる。主よ、あなたは罪に陥る者を少しずつ懲らしめ、／罪のきっかけを思い出させて人を諭される。悪を捨ててあなたを信じるようになるために。」 知 11:24-26;12:2

📖 「キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。最後の敵として、死が滅ぼされます。」 1 コリ 15:25-26

「死は罪の結果です。教会の教導職は、聖書と聖伝とを正しく解釈する者として、死は人間の罪のゆえにこの世に入ったと教えています。人間は死すべき本性を持っているにもかかわらず、神は人間を不死に定めました。したがって、死は創造主である神の意図に反するもので、罪の結果としてこの世に入ってきました。「人間が罪を犯さなかったならば、それを免れたはずの」肉体的死は、人間の打ちかつべき「最後の敵」(一コリント 15・26)なのです。」カトリック教会のカテキズム 1008

「理性的で自由意志を備えている被造物である天使と人間は、自由に選択し愛を優先させることによって究極目的に向かって進まなければなりません。ここで、正道を踏み外すこともありえます。実際、彼らは罪を犯しました。こうして、道徳的悪が世界に入りましたが、これは物理的悪とは比較にならないほど重大なものです。**神は直接にも、間接にも、いかなる意味においても、道徳的悪の原因ではありません。**それにもかかわらず、神は被造物の自由を尊重して、道徳的悪を妨げません。また、神秘としかいえませんが、そこから善を引き出すことがおできになるのです。」(カトリック教会のカテキズム 311)

2. 肉体と霊魂から成っている存在である人間の死

「神にかたどって造られた人間は、肉体的であると同時に霊的です。聖書の物語はこの事実を象徴的なことばでこういい表しています。「主なる神は土のちりで人を形づくり、その鼻にいのちの息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(創世記 2・7)。したがって、人間のすべては神の意志のとおりにできたものです。」(カトリック教会のカテキズム 362)

「聖書がいう魂とは、しばしば人間のいのち、あるいは人間のペルソナ全体を示します。しかしまた、人間の内部のもっとも奥深いもの、もっとも大事なもの、すなわち、人間を特別に神の似姿にするものをも指しています。つまり、「霊魂」は人間の中の霊的原理を意味します。」(カトリック教会のカテキズム 363)

「霊魂と肉体とは根底から結びついているので、霊魂を肉体の「形相」というべきです。すなわち、物質から成る肉体は霊魂のおかげで、生きた人間のからだとなっているのです。人間のうちなる精神と物質とは結合した二つの本性ではなく、**この結合によってただ一つの本性が形成されています**。」(カトリック教会のカテキズム 365)

「教会の教えによれば、各霊魂は直接神によって創造されたものであって、親から「作られた」ものではありません。教会はまた、霊魂は不滅であると教えています。霊魂は死のときに肉体から分離しますが、消滅することなく、最後の復活のときに、再び肉体と結ばれます。」（カトリック教会のカテキズム 366）

「霊魂と肉体とが分離する死において、人間の肉体は腐敗しますが、霊魂は神のもとに至り、栄光を受ける肉体に再び結合される日を待ちます。神はその全能によってわたしたちの霊魂に肉体を結合させながら、イエスの復活の力によって最終的には肉体に不滅のいのちを戻してくださいます。」（カトリック教会のカテキズム 997）

- 人間の霊魂は不滅なものですので、体から離れても存在し続きますが、霊魂だけが人間ではありませんので、霊魂は存在していても、人間が存在しなくなります。人間は、創造主の元々の望みにしたがって人間として永遠に生きるために、腐敗した体の復活と、この体の霊魂との結合の回復が必要です。それは、イエスの復活によって可能になったのです。

３．復活信仰の由来

◆ 復活したイエスとの出会い：　婦人　（ルカ 24,1-13）
ヨハネ、ペトロ、トマ　（ヨハ 20,1-29）
エマオへ向かった弟子　（ルカ 24,13-35）
パウロ（サウロ）　使 9:1-8

◆ キリストの死後に散らされた弟子たちが再び集まり、復活を中心とする信仰の共同体を作り、この信仰を宣べ伝えるようになったのは、復活したイエスと出会ったからです。

◆ イエスが復活した瞬間を見たという人がいませんが、イエスの体が墓から消えた、それから、復活して生きているイエスに会ったという人が大勢います。私たちの復活の信仰は、この人たち（使徒と他の弟子たち）の証に基づいています。

「復活徹夜祭の『復活賛歌』では「幸いな夜よ、お前だけがキリストの死者の国からのよみがえりの時を知ることができた」と歌います。事実、イエスの復活の出来事自体を目撃した者はだれもおらず、福音記者のだれもこれを描写していません。復活が身体的にどのように行われたかを語りうる者は、だれもいませんでした。ましてや、その秘められた本質、つまり、別のいのちへの移行は感覚でとらえることはできないのです。空の墓のしるしと使徒たちが復活したキリストと出会った事実とによって確認される歴史的出来事であるキリストの復活は、相変わらず歴史を超越し、凌駕するものとして、信仰の神秘の核心を成しています。復活したキリストが、世にではなく弟子たちに、「ご自分と一緒にガリラヤからエルサレムに上〔り〕、今、民に対してイエスの証人となって」（使徒言行録 13,31）いる人々にご自分を現されるのは、そのためなのです。（カトリック教会のカテキズム 647）

４．復活したイエス（ルカ 24,36-48）

「教父たちは、死によって分離した霊魂と肉体とに結ばれているキリストの神的ペルソナから、その復活を眺めます。「人間イエスの二つの部分にそれぞれ等しく存在しており、その死によって分離させられていたものが、神性が一つであることによって、再び一つのものとして結び合わされます。人間として合体していたものが分離することによって死に、分離したものが合体することによって復活するのです。」（カトリック教会のカテキズム 650）

A) 前と同じ人間（幽霊ではありません、前と同じように食べる、体を触れることができる、傷が残っている）であると同時に、全く違います（時間や区間、形などを超えている）。

B) 復活はただ地上の生活に戻ることではありません。（イエスによってよみがえらされて、地上の生活に戻った人たち（ラザロ、ヤイロの娘、やもめの息子）はまた死にましたが、復活したイエスは再び死ぬことがありません）。一コリ 15,35-50

C) 他の人のよみがえりは神の国を示すしるし（奇跡）でしたが、イエスの復活が地上の歴史や現実を超える新しい現実（神の国）を造るのであります。

> 「キリストの復活は、この世のいのちへの復帰ではありませんでした。ヤイロの娘、ナインの若者、ラザロなど、ご自分の復活以前にキリストによって行われた蘇生の場合とは異なっています。この三人の蘇生は奇跡でした。奇跡的によみがえった彼らは、イエスの力によって通常のこの世の生活に戻っていきました。そして、いつかは再び死んだのです。キリストの復活は、本質的にこれとは異なります。復活したからだをもって、キリストは死の状態から時空を超えた別のいのちに移ります。復活したときのイエスのからだは、聖霊の力に満たされています。栄光の状態で神のいのちにあずかっているのです。ですから、聖パウロはキリストを天に属する人と呼ぶことができました。（一コリ 15・35-50）」（カトリック教会のカテキズム 646）

D) 普段、私たちは、イエスの言葉や復活したイエスと出会った人たちの証に基づいてイエスの復活を信じることができますが、他の人と出会うように（見る、触る、聞くなど）イエスと出会うことが（現代にも！）あれば、感覚を超えて、イエスと出会うこともあります。

５．イエス・キリストの復活の意義

A) イエスの教えが真実であるということを示すとともに、この教えに意味を与えます。

📖 「そして、キリストが復活しなかったのなら、私たちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。... そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、私たちはすべての人の中で最も惨めな者です。しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。」１コリ 15,14.17-20

- キリスト者は、何かの教えではなく、生きている方であるイエス・キリストを中心して生きています。
- 復活して生きているイエスなしに、キリスト教は、奴隷のための思想にすぎないものになっていて、人間の成長を妨げるものであったでしょう。
- イエスが復活して生きているために、キリスト教は、人間らしい、豊かな命への愛の道なのです。

B) 旧約聖書とイエスご自身の約束の実現です。

📖 「私たちも、先祖に与えられた約束について、あなたがたに福音を告げ知らせています。つまり、神はイエスを復活させて、私たち子孫のためにその約束を果たしてくださったのです。」使 13:32-33 （また、２コリ 1:20）

📖 「それは弟子たちに、「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する」と言っておられたからである。」マコ 9:31

C) 復活によってイエスは、罪の結果であった死に打ち勝って、私たちも復活し、永遠に生きるという可能性を与え（創って）てくださいました。

📖 「キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。最後の敵として、死が滅ぼされます。」１コリ 15:25-26

📖 「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」１コリ 15:54-55

D) 神が、死よりも、他のすべての悪よりも強い方であり、神の計画を滅ぼす力がないということを表します。それから、神は誠実なかたであり、ご自分に信頼する人を失望させることがありませんということを教えます。（１コリ 15,20-22; ロマ 6,4-5）死と苦しみに対する恐怖から私たちを解放しました。

📖 「このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである。」ヘブ 2:14-15

E) イエスは本当に神から遣わされた救い主で、神の子であり、いつも私たちとともに。（エマヌエル：ともにおられる神）イエスと出会い、共に生きることによって神の国の喜び、そのすばらしさを味わうことができますし、永遠の命にあずかることができます。

📖 「イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。<u>わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。</u>」マタ 28:18-20

F) 新しい創造である復活の日

「イエスは「週の初めの日」(マルコ 16・2)に死者の中から復活なさいました。キリストの復活の日は、「初めの日」としては世界創造を想起させます。安息日の後の「八日目」としては、キリストの復活によって開始された新しい創造を示します。キリスト者にとっては、あらゆる日の中の最大の日、あらゆる祝日の中の最大の祝日、主の日(ヘ・キュリアケー・ヘメラ)、「主日」となりました。」カトリック教会のカテキズム 2174

「主日は、安息日とは明白に区別されます。暦の上では毎週安息日の後にやってくる日ですが、キリスト者にとっては安息日のユダヤ教的な儀礼に取って代わるものです。主日は、キリストの過越のうちに、ユダヤ教の安息日に込められた霊的真理を完成させ、神のもとにおける人間の永遠の休息を告げるものです。事実、モーセの律法によって定められた儀礼はキリストの神秘を準備し、そこで行われていたことはキリストにおいて成し遂げられる幾つかの出来事を示す前表だったのです。

「古い生き方で暮らしていた人たちが、新しい希望に移り、もう〔土曜日の〕安息日ではなく、主の日を守って生きるとしたら、わたしたちは、どうしてイエスなしに生きていかれましょうか。主の日に、わたしたちのいのちがイエスを通して、また、その死を通して現れたのです」（アンチオケの聖イグナチオ)。」カトリック教会のカテキズム 2175

「主日を祝うということは、「神がすべての者に共通に与えてくださる恩恵について考え、目に見える形で神を崇敬する」という人間の心に刻まれた倫理的おきてを自然に守るということです。主日の礼拝とは、旧約の倫理的おきてを果たし、毎週、創造主とその民のあがない主とを祝いながら、その周期と精神とを踏襲することです。」カトリック教会のカテキズム 2176

６．復活の体

使徒信条

天地の創造主、 全能の父である神を信じます。
父のひとり子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。
主は聖霊によってやどり、おとめマリアから生まれ、
ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、
十字架につけられて死に、葬られ、
陰府（よみ）に下り、 三日目に死者のうちから復活し、
天に昇って、全能の父である神の右の座に着き、
生者（せいしゃ）と死者を裁くために来られます。
聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、
<u>**からだの復活**</u>、永遠のいのちを信じます。アーメン。

📖 「死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません。愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を得ないではありませんか。あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。どの肉も同じ肉だというわけではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉と、それぞれ違います。また、天上の体と地上の体があります。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています。 太陽の輝き、月の輝き、星の輝きがあって、それぞれ違いますし、星と星との間の輝きにも違いがあります。死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。」

1コリ 15:35-44